増見遊覧記

卅二上

和書門
類
二九一五七 號
二六 函
九 架
七八 冊

内閣文庫
和書
類
二九一五七 號
七八 冊
二七七 函
二九 架

内閣文庫
番號 和 29157
冊數 78 (32)
函號 177 901

第三十二冊
贄のおろみ

国立公文書館
National Archives of Japan

此冊子の名を贄の柵といふ事は信田が其の事
ありてあけ多れをものの事　やうそうり
扇田の物語　達子の森の圖　伊達治郎泰衡墳
人の栖家あはれ祝服陶ふるのをとかくしありけり
杢峯のやかりし　驛路乃鐸の物語　さりし瀧
井殿冠者安藤太郎良宗北の婦はあと残しはべて

多巨ハ移記みこて
十一の〇ひあり
元の神ある事代主
の御神きまる神子
とりとして愛宕加ある
ふかうさとらりぬる
哀美須加持の名そは
りけり

十却院ハ紀主禪師
の一枚起請文を讃建
社良定上人ゆるし
渡しんのころ書給ふ
ことありき

徵南通企の朔今朝ハ氷室乃祝ひして誰ゝ屋戸ゝとこそ
氷餅そと齒固するものしるしうけは移託の盲れ女巫の
外ふちらわうそ　さあうしみちち北御祈禱ふハ
さらぬの鬼の王をと原孔雀んまてきゐしさとは佛
法の山ハ志んけれしをさん作れ北石ハ巖となれ苺乃むさて
まで苔れ杢ハ八千代をかけて君て海すはせんとめてやゝ頭ふ
挂ゝは長すをきそ鳴して唱はまこともまとそれ文門はさと
いとの秋つきころて　沖の鷗乃寄来ゝかハ北我のはるひ鳴我樟より
二日武田のりをまら法王寺却院正覺寺ふ源九郎義經の
高館ありしあいし御佛とそみけひきかしかる正觀音ふさちを
砌の堂ふ上（尚ゆりとうん化柳と稱木りて業上總介當長
古墓の上味酒い三輪のちまん御神籬をとし齋ふ祠の方からの辨ふ（アツキ）

圖書局文庫
淺草文庫
日本政府圖書
内 一〇九三五號

檜山の郷に近く比内に
在る大舘に當る稲田
村といふ處ありそ
の前なる處なる扇田
の名也けり東や佐竹に
うつりて後なりけり
佐竹の屋敷は鐵道
の北妙本寺の東の山に
五本杉の三明の上に
ありて今はその下を
秀義の舊宅といふ
と新編録志にみえて
ここに扇田も佐竹の
たちしのなるらんや
あらんかし示して
今は乎て祭りしまや
を見聖同の形すてあり
なるよせふのつかしかり
き二井田四十世者て新
井田仁井田なとかれなり
なれ
このあたりに英の村
のむかしはいかに
いろいろとさしまちなり
人むかしれ

此人が稲田のありそれに要房とて當田のそひて二百廿刈乃
税を佃作しふさうれまことの里とも扇田の名はあへは事さかりし
とあれに田此中路にはいとり二井田此やうきれ中道く見ゆる
きよろむかりとせのむかし厚樹山無根藤が軍窮れて
陸奥の押領使藤原朝臣泰衡がちらくろひし蝦夷に
ちしあるや渡りあし出羽の國にいろで世をあのむもの郎徒
贄の柵に栖めはをまつりといしふその郎徒なる河田の治郎
ありけるかさこる心かはりて泰衡の首をうかしませてやすたち
やそうつその頸をわれ品にまでまつろんとしにておそみけるに
をとは馬にむちしてそせはすうありしとこの文治四年戊申九月
の三日此十七いかん二日たて在りし世を偲ふあはれなるに
そのみつはうれ木のけしも吹風のあしきまくつ百の

身やそれけむその墳とてみちのかたへ此田中の出向（イテムカヒ）と
いふ處の中には紀杜に猪心山櫻九生いまつに松乃あまりに鶏居
ありといふてうむかし花の樹好きなる塚ぬしそ花咲く樹
のこ殖し手酬なりけるこれ大太郎國衡のおしまてみれ
かりけるより云ふや吉此も人と西木戸龍とといふて由の神とあかめ
これいせ大都にすすめは伊藤善韶の書けはやみにあれと
れしぬらいまことしてまつはしろけなる石此なるを立あり
伊達次郎泰衡のしかれたりし日はなうの月の二日なりし
されは九月三日に見つわさとしやすい此三日まで見るまで
まつはあとに田草株は女とものついに語りぬ二井田に贄田の
あるや贄の柵の址やさあしとまふしに八幡の神籬を
まつり古舘と云ふ此さいそのところをやや少しつんし遠き昔に

性をやつかきらん贄殿やあらんもし遊紀ありし釈迦門
といふやうなりき道宗入道のむすめ韓絲姫の紀にてとぞ
祭られし釈迦佛をまつる寺建給ふ五ヶ村の名處の名も斯夜
佐寧為といふとぞ然れど釈迦門の名どころにかくれし司野篤富貴は
りし搬菓の辭して奈以は澤ふさといふておりすなはちむかしこゝに
坂合部連贄宿禰のありしところや贄といふ名のよし見えたる
釈迦内の相似たれもさだかならずおもひあはせられはべりしかど
うちすぎて里あるやまかげやよきところにぬさかけて年田のやしろや
高邑といふところ於白洲穴といふ草のやまに茂りたるところに
て巖松山温泉寺を田つゞきに見わたして中暑き安あり
まつ時うつれるに角坂(ヤスミ)をかへりてむすびしくさの前庭うつし
陣(チン)い越(コシ)も見めぐりて寺崎村といふあたり五輪堆まゐりぬ

さても伊達治郎泰衡の嬬(ツマ)なりけるはまのりゆきとぞいひけるが
篠原の中に身をかくしていたく二日三日へてつひにかなしみに泰衡をしたひ
聞えしなんといふつたへきこえしよりありしにさて語
つたへしのちにはさて長谷部藤右衛門てふ家の老が五輪石の
のこりしままにひとつをぞ三残りしを磨して堂を作りてとどめ
奥津城とぞせりける伊達郡の田の神といふとしていやしい
の三日なり月の三日には御酒染をまゐらせ祀るといふ南の山
にいふは八幡殿の館址とて神籬ありとぞいひつたへたる神を
齋ふ神門やその前田といふ村にまゐりたるに桂清水とてこの
ありふるき寒泉涌出す事南部路に通ふ観音薩垂ありしなり
うらしてえる月のかげのきよくむすびてはなれ
涼しかりし杉澤の村のあたりに坂の路をいくつかある處に

桂清水は陸奥の鹿
角郡浄法寺の外に
毛馬内の神田村に
田名部の邊にもあり
稲搗唄に桂清水は
戀の水四十男も若く
なるなど多南天のうの
村そのかしこにふ

披とはあまつき
たちひさしの
こくッやまき知
をうしつゝよ

小祠あり長紀石をもて立たりて瘡神と申す品に草
ハ幡のごとく身に瘡を出給ふ御神とぞ申すなる大子内の村なり
大披といふ村をへて中日もなれかまじと宿かりて泊りけり
蚤蚊のいと多く一夜のいもやすからずいまく外に出き
たけ山北より紀に鶏鳥の卜歎(ウツカヤ)村など淋しう立つ起出ゐつ
三日流をわたり手あしひつとめるくのちりの中ゆかしさかかるもの
いさゝかのこしく出ちぬあなれば手を折てやすき世のむ
しあとの破布筒開といふを過ぐりこゝを曳欠(ヒツカケ)
河とて於差崇以の澤と源とし流れ来るもの人ふける
の高岸此水の落ちまゝれ共落る所中に家居二三をあり
さしはくもみ此こそとる泥ちのつらに埋れたりなんとぞこの家の
栖家の在りしことを語り傳へて知りきといふ侍りしぞかし

ほれものやうの板のいと厚く黒きを掘りいでゝ取りつゝさ
とつれば棄稈筆硯箱ひちやうを家の中に被彫ら
みなんあり木の皆ありけるかいと大きにて此ところのみのはなし
これなども一つれに右あり花のりてゆずれなむ所な
る德なし筆をもわしつゝ花石をこのみて作でさしさくぬ
さりてうのりゝつき多くしらん聞とどうへても水もいさ
なれは良厚おありてところ小山のやしにてひき連て塊を見
ぬ良材(ミヤキ)を崎てゝさきく良しおそるしてこのとの岸に臨てうち死ハ
木の根の大きやうなる川にありそれの上なる厚ふいとひろき野の
あつけうで六のふめいきてしを鳴りぬいまき土の底に屋形との埋りく
尚あるんと語りたりにきさるを杖をとりて見やすき翁の耳うと
うぬる来りていて長まり延德のむかしのことやいひつるんかなあるよ

子山あり。あゆみて出る寺の人此住りしといふめでたき親の
為に薬師の病もなやみてんつく杖を突きおほせのこいしけり
あひも老らくを別て小衛の村より方のけり此詞よめしと
巳波加摩といふあれもあまとかやこの名といひつけるはそのまま
をとへを唄ふひ菜刈男の褌破れてゆる出河村の道を
あふ在りとうち戯きてこを聞つるも舎やといふめりた
地蔵山ホの名を庚申山といふあ青見の澤桔梗堆と称ぶ
おりからけふころはひとし咲けとうふれすぎちよかるハ水
とい体ひいる引懸川を渡り人の手せ槇崎村に打こち
かみさくなり吹つはるの出川のやまつきて又水といふのこそ体なまず

夏草をわけて行ば日くれぬるひとむまい

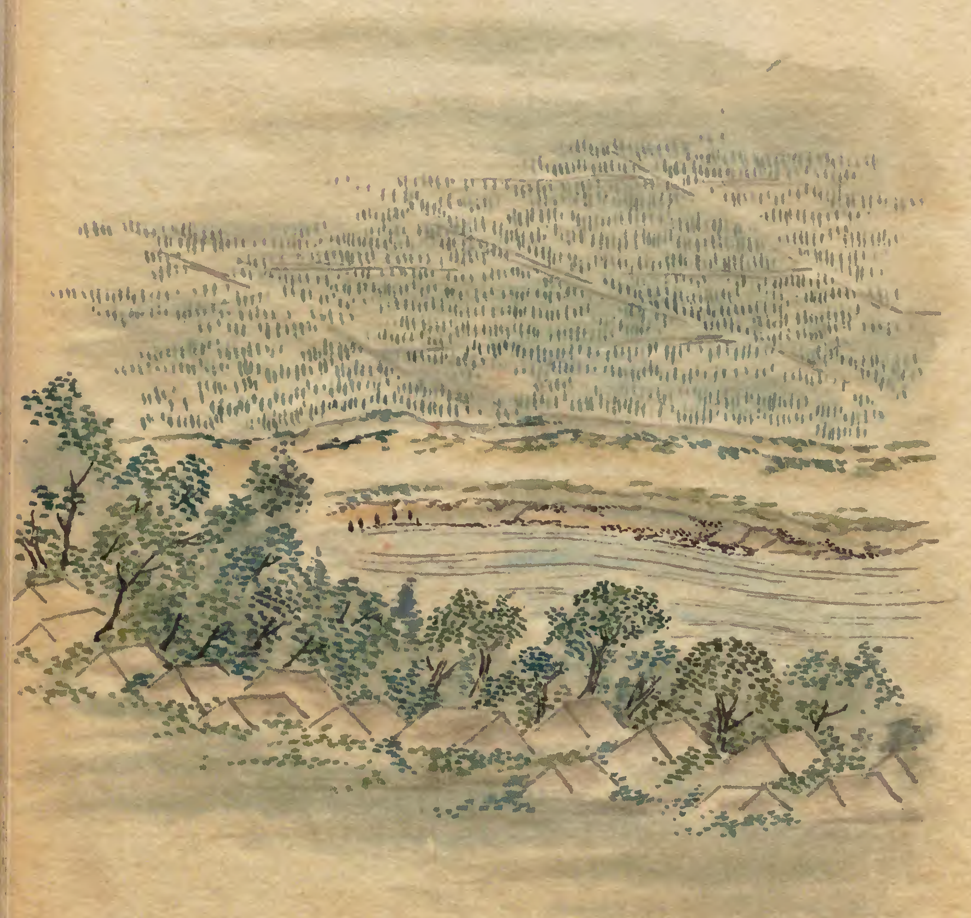
ぬまむさといしてやとをさくまりと究る

四日うちぬれてやあつさまさる元かちよかるもをもって
まさを屋戸の何ぬらしの病とハ本ぶ人のふるまひを
さるこちりしと定へひろし贈る賀年具良田地
具和多羅毛知ちかすのを以して云する進めぬ人るる餅ハ
鍋子摺といふお魚そゑとちおまりちおと数々の名され
牡丹餅萩の花ふしのこひかつりちひてとはす添のち
真餅ちとのとしうちさへ近づけり
八日大子内此村の長といふ家にとめけるを、ありし月
ハ廿五日比大雨にて三層瀧にて岡啄や出つ人々の行る也と矢
石すらいへや瓜ぬるあひ木根て出る流れけるも近きほとより
洪水ありけるを八十あまりなる人を手とちらしおきて大蛇をさまれる
委波婆美あるいは宇波婆美といひ、みちのくにはの…

叩加馬眉とそいふめるはおのれ素盞嗚尊をいふなり
天蠅斬の劔をもて大蛇を斬給ふを古語拾遺に云
素盞嗚尊あめより出雲の國の簸乃川上にくたりまして
あめの十握のつるきをもて八岐の遠呂地を斬給ふ
そのつるきの名を天の羽羽斬と云君呂のとかるを作りと
云ふと葉を截ちをすといふを伝ちを斬るのなり
うたかひなられからはみえねはさみたりいふみてある
これおもそこふ言葉のうつりよはおもんて
十月日尚あつさ避きんと五日おかあはれ左藤のりよ俵
つれあひてよみしてもふいたるの村と櫃埼の麻呂足
定政のりよりふるの返事をこめて　楽山子なは身
ともあり人と山畑のかけりし人よと許さうさこといふせ

それは謌のさまことにして
おもる葉の花れかてのしと身をなしてせふ
すむ人や楽しの陰に

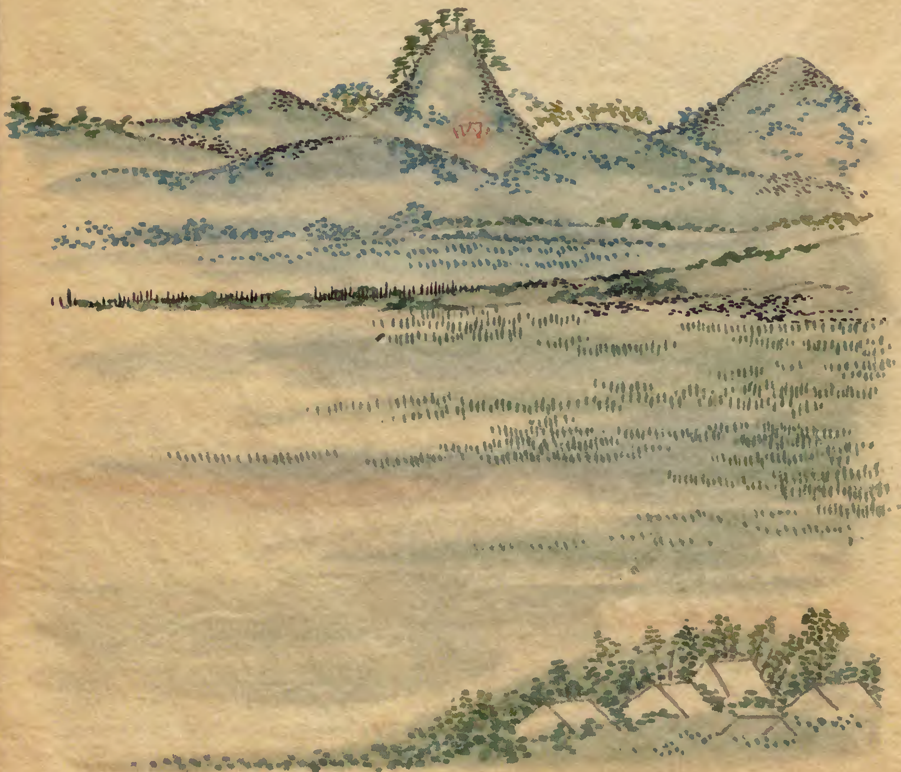
達見の杜は山足のやうにま
三輪にある神をいはひ
うつしはへまつる神ぬし
石代なふしつ屋戸の
ありける處ま扇の形にて
小田あるもいま要房とよ
ひとまちとなへらされ
里と扇田の名まあり



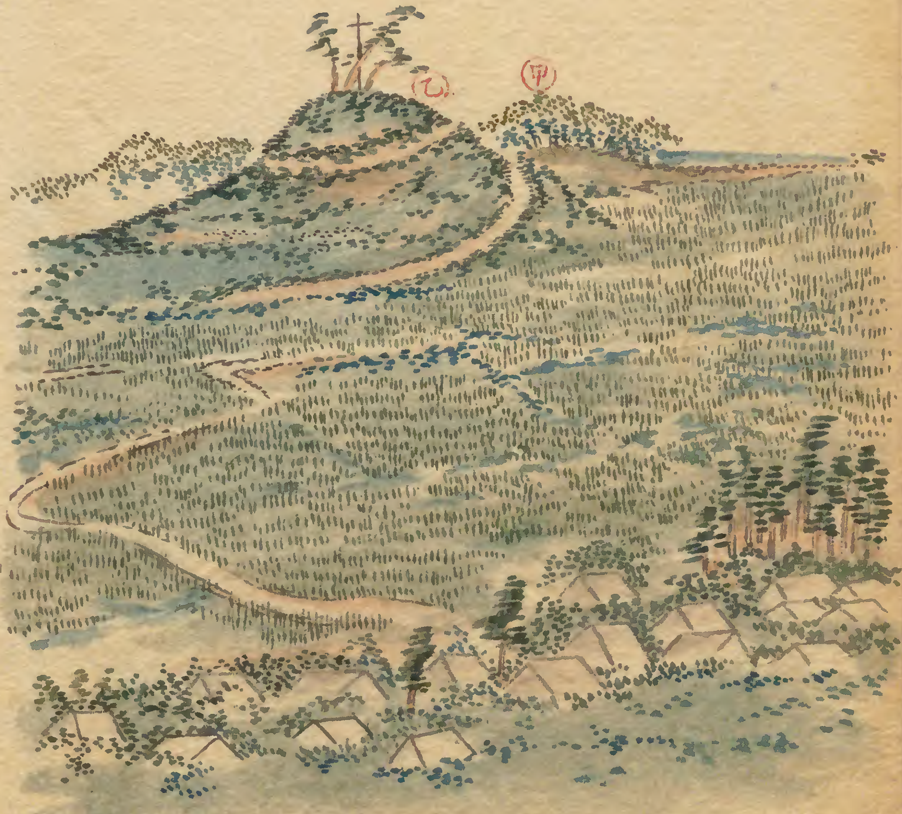
扇田の里より仁井田へ往復
のうちしうり
此まちしは里も
かくふ田児なみのて
りしをめとく
二井田のおまぞ
藤原泰衡の墓ハ二井田村の
末摩川尤本より
以底武加比ニ以見
面子在り

陸奥押領使藤原朝臣泰衡壟

巖松山温泉禪寺と高村の
えゝりて望む所



(甲)陣埜腰
杢生ひら
(乙)庚申の　つくせり
(丙)委刀利
山なる



国立公文書館
National Archives of Japan

藤原朝臣泰衡の嫡壟とて五倫臺村のとし藤右衛門とふか苑よ在り

(甲)庚申山あなたより地蔵子岳へ
(乙)小袴村ニ在り
(丙)桔梗堆(丁)青身澤かと
つたなり
(戊)大披村の(己)ながけの
岸と(庚)引懸川流れて
(辛)杖澤の駅近て大川と會り

於保毗良吉村の
東掛河の高岸
欠くれたる處より
こや木あるいは器
ともなるべき姥
天明のとしのあさま
雨のふりにして
此ふきよりて人家を
出でたり粟稗
あるいはものと
ごとくにさらし宮も
せんかたと流れて
ひつきよりそう
まつらひなとも出て
天若のむかしもうこ
る山ありて高かきを
ろひしてふつてものを
ころまつしてよいにしへ
人つし地震のよの
ことなりてくわれは
藤の葉のさくをそうちや
見せてあやうし
あり

委刀利ハ蝦夷辭
にてやまる山詞なりや
夷人言葉なりやあん
母山にて高島のたく
ところにしみいとまえ
る名なり

おなしく十七日左藤久五郎のいともなひて出川のやまと
をさしりけるもかし志古加波良といふやまをさして巳午
のかたに姫箇嶽寅卯の方に杜良の峯午未の方に谷木橋の
村おほ委刀離ときまおとにそこ雲かさして中にあれたり
二井田埜とて廣き野の中を行くちの方に蓑掛といふ
ありその松のたてるハ枝葉みなれて衰へたるけんと然
きこゆれともいにしへ野火のかゝりて枯たりし松とそ
そも那しつてりへのかた高きところに雲の雄つきてその跡
きるしとして今も名におへり赤石泰衡雨のふれる蓑笠着るみ
ちのみちなるなみのまつなれも見しもいふ浅利典の裏権の
ねもおのやまちしに語傳さとに雨のふり来れと
雨そのしつみの雲の往し世をといひてきぬれと

曳懸河の故より堀出る所品

身にしみわたりぬ。こゝらときゝし篠生といふ処に出て
米白河の渡りして大館の里にいたる。近し雨をまみれして遠
きこゝらに雨さそし吹むく風さしきまて吹に吹ぬ。
かしかひく路ありくは風わたりけるとすし
渡ヶ舟長根木戸といふ村の馬手にあたりける在家
の中に朱の鳥居並立る八船豊受比咩のおほん神の籬と
灼然く見奉りける神籬の行かたにぬさとりむけて
やがて大館の郷よりぬけの十狐の村から和田野ちらせり
といふ鳳凰山王林寺に阿佐利の家乃木氏のありける
此事すでに日記にいへり。此寺に見し多し鬼面城立石
天鼓に鞠合なと名にふところの近郷さらに在りにも三太刀
川にふ流れつゝやまんありとのこ吹て百處志つて十狐町

図書局文庫

大館の城はむかし秋田城介實季のすみ給ひける安東忠治郎實季の君あるじなりしころ南部よりめとり給ひし比内御前と聞えし其ときうちかたつはりて夜となく出つゝありつる比内の方浴し給ふとてあやしの男の来りうかゞひつゝ殿に告まいらせ比内のまかりしとおはしけれど、名をのこさんとて短刀をもて臍の下にかしこく女の湯あびのよりてうちふよくへも包之ふたの来りたる二刀ましかく山嶽々ありしなど

とふを過ぬ浅利世に栄えて住ける処にありけむ
さりしひとよりてあなされ多かりけむ家にて人此尊に在て語
るのみ志ぬ獨鈷町の名もありけりのふれすも足軽のかたらひを
さしかた栖せ給ふすゑを指ゆまいぬ公のおはんとつゝみ
行かめ里を放れて長樹河を渡るかめ水に茶垣山の峰
晰苅山とて真木のしげけやすの津苅の郡を迫めて大峡小峡の嶺
わたり谷めぐりてぬけて山路に阿仁山陀比良山にまゐりて
茎いと太く長く葉いろしこる杉のひとりと
生立て千代経し蒼彌白といふ杉の派を採りて香とし
ろの音のや高くなれと飽田楫の名も世にかくはひとりも荒
さらぬ人のきゝて汗をなめて大館のやまを見さして
一本杉といふ坂のいとあやまかん中つなのえてかさなり

船石神とて山の尾にある石に似たるなりけり、其ほとりにおゆるは
見えわたりぬ。獅子守山はむかし大笠山と名くるが、妙
かは龍の吹くしの名の微妙山の名ありて、此麓にいまそかる
わかくれて坂子石色をそれとやりて杜のありけるとかや
社を高やり子御坂を作り斎の金精のいろかみとぞ
雄元をわてのそらふやろふありて初七日山をおいて色あり
文字ありて額あり、堂の内には道宗入道の弘長むかし國の
ものなりし妾韓絲の前乃あるとて此めでたき寺をも
釈迦牟尼佛のことしろを三躯作らせ給ひしを
給ふにはとてあがむべきもの、めでたき釋迦内にやとあらん
亂川といふちいさき流れにわたせるを乱橋といふ也
山よりむかしはむかし軍のちまたにていくさ君のみ乱る名や遊

尾張の國山田の郡の鳥
九明長承久乃亂の
ときさしつかはれしとかり
鎌倉がたの義明の
見える人にて湯井の濱
にうちよりしを
乱れ橋といふ所にて
年来の習ひにあひ
て此瀬川のりのきう
とせしとなりとぞ
なのさうちの石集
等にもみへてあまた
名の此内にもありと
近きに鎌倉街道も
あるにはなれもありし
所しくも偲ぶにあはれ

名の相模乃國にも此あり、岸の柳のかげにたちて見わたせば
山もなき柳のいとそれ橋みなかりて涼しき風の
涼しさ、此河のみは、貴人留とてなむ、鎌倉往復
せし山のかげにありてすこぶ泊しけるあまたの貸むきにありて
しもとよりいひて縫ひさせし物語は、みちのくにありなれ
在りし、朝不見れいまも残りけり
乱河それし波のつたへきてうちとまれ
此代のさかりは暑さを人にまさりける
うちのふるさと休みあまりふさうありの里なれ
十八日杳峯にふのありてみやこあて夜経帰りし酒
殿のあるし作右衛門とりて微妙山實正寺の
東あるは小坂をおりて霜内河大森川など渡りて

ひとりごとにしられは雨もれの山のしつくさいとおかしとぞげにこ
そ蓑着たる男の長事にあまのまとつくとききされて何まて
かくりて田畔まされをさしけりしけれは風のなびくをみても錘
のかけるあるのをかんきや阿仁の社そて見る田鏡といひけりの
かれとおもひそは稲の鏡となづみて名たかりけるも亦おかし
又り葉もしるも穂とそ以なをしるみをしむらる出るたる
ありいかんはは月の夜し先田つるに立居なりしなくもよしは
月ししはくらかしくれを紫無月に出穂のありしがごくもせられる
いなかみたる禾居そて兼穂にならいはきるなりくさふなるを
おもろくしとく程ふるもしらもやみのしほみての稙と
さての辭して居むとさりしまれ田の面に女のそ浴と
田草とる處女やまもふはなかりみつる葉は露の

王をうつして今ぞ戯れぬるあそびらん大森のわたりをとほれは
杢峯とふやまなりけり、麓まで行は路の辺に妻手遠く
見わたれをはは雄神山雄神山尉茵森などいはれける
長木山は遠く、萩茵杜、橋桁白澤寺野澤、松原などいふ
處をへて長芝のせき屋陳場邑とてやすらひきぬれは
あまりのあるに、楔川を渡はやよとかはほど、波良避
河安南多巨奈當熏能與言布己惠加遍者乃聲可
加波逦瀬濃音といふひとうたを神樂唄にぞせりける
とかんは木橋あやふくて
水無月のはつさをふるにもしひ川せの浪の
うら涼しさ　山もなみのれは伊勢はちこを齋祷常然
普賢石、草は幡石なととてやしるれは験者の寺あり

本山峯山傳壽院とて此家世々経りけるよし今の別当ハ
祀りして此をのちに不動尊にまうしける今もしるものもあり木の名も
いまさらさら草もちけるをつくせまつる岩群もれ流れて
大峯の順逆のかきをしれありてたれハのたとへいのかれかゝれ
こゝろ月はしたのれしてさわりしを遠きむかしを近きにちかひのうへ
そこて大峯葛城にいまうつゝやはをもてまつりさんをくをとある
數理鈴數頭襟まして ひきしつおやひ笠にかとをし
とて獨鈷杖に法螺錫杖を鳴らしつゝ峯に入りとおほく
つけし山ハ空海の開き給ひし嵯峨の帝もおほしんとき
弘仁八とせに両部金台のこころをはおもひをこらされ觀音
のみすかたを鋳させたまひてまつるをみのかたみを作らせ
御代をいはふ黎民（オホンタカラ）やすらかんのおほんいのりもありとかや

十三年壬寅の春、左大臣誠公卿杜良の嶽にわけのぼり
てんをはらひ給ひしのち雪のはま深かりしかの松峯にお堂
建て寶あまた寄せ給ひしを文徳の帝此天安のとしはしめ
やよひの三日此事にあるなる〈たふとみて堂舎をまうけ給ひ〉山らく
つけらく御佛たちあまたの底に埋れ〳〵三千の年を経ぬるふ岸
多の帝の御代寛平ここのとせみなつきのついたち菅原の道真郷の
おほみ手して月山権現といふ額をかゝれたまはりぬ月の山
の神をいつきまつりてよみのくにのたとへたまひいて御製を給ひ
光も時に埋れしおもいてれ照らしも此峯の月とはあかれ
おほみうたのたりしより本峯の月の光も日に増し堂に逆
あたりのおほんた使を出羽郡司小野良真の子當良房に
給はせける延喜七年十二月十五日にあふひ御堂作り成りて

うつし奉り手斧ものしけるとも小野良房朝臣〈奉行記にハ〉と
なん。此ころへありける後朱雀院の御宇に平鹿の郡なる
御嶽山におはしませる塩湯彦の命の臣卜部大連氏致
の末比子にて満徳長者保昌といふ人家を出て保昌房
と名のりて真熊野に在りけるが夢のさとしあるに
西の寺ありしをやかて都に登りて観世音菩薩の丗三の躯
を大佛師定長に作らせ比叡の山の阿闍梨教圓に
見せて此寺の供養を乞のよしいのりて郷に登り来て
おもひまつれるかしこき名あるところの山々に
まつり奉りしてこのみちに雄勝平鹿仙北河辺
秋田山本此六の郡におきて長久のころ教圓阿闍梨を
保昌房ともに来りていさなひ連てこの観音の堂建ところに

あまたうたる歌詠て手向て西の寺ありしにまうでてつひに定めたる
塩湯彦の神社の近きに在る温泉嶺の白瀧の観世音を
うつしまつりて出羽山に三十三番ありとし
観世音を名を得たりける雨手にありけれハ今もとなむいはし
金剛如来といのりけるとしまた不動明王をうやまひ観
音菩薩をおはしまして山に入る物語多かれどもきよう

我おもふ人青山嶺の

あふとうたはしとひふ鳴ぬらんと詠りあるく

秋をまつことの木すゑの涼しさに鳴とまる蝉の
聲かしら雨坂ありしとそれをまた植ゑし水をおさめ今ハ
いと涼しえつあれハ坂のかたはらに水の神観世音宇賀の神を言
おまつりやしろ堂まつりて不動尊に詣てたりしそれより手に
みさはの薬師ふちの堂まことに人あつまりし坂をとりておりまて

雞栖のひんしれ径ふてく幸の神平といふ野原に出て高き塔のあり
なかにのありてあやしき見れはかなはず頂に数ありていにしへ立しにや
石を道君といひそれより船内潜といふ巖窟の内をめぐりて出
のぼりて松杉の峯ありまたしてしあなたの寺あり堂なくはなれ
いや高くさびたるも峯のうへにて千代ふる寺ありといふ
壽命の寺。かくて日もかたふきぬれば此傳壽院のもとに一夜をこひ
宿りぬ。あるじの云ふ系の遠つおや神の祝の家にしてはじめ
家を作るよりて善左衛門久作などと名のりつぎて世々をつぐとて
役の行者の法をさづけて世々壽長し金藏院の翁九十三にて
其翁の世に明應のころ南谷のあたりより驛路の鐸を得て
おかきあそこ翁めでたきことの寶とさため我が世まで八代持つたへ
中老らしう近き頃しも此鈴をのせまうて寺に奉りしとぞ

と聞しその鈴の圖とて人のうつせしを見しにおなじきものにて
ありやあらんその世にもめつらし常陸の國の正等院に存りといふ
つゝ似もやうしやうれなるあかまことにかたちの似るも世に
あり天安の年地震動ありて堂もの名残りなく埋れし
ときなり御鐸てふ鐵鐸須利衣ものをやあらんといひ
鈴と見れ其子しは驛路の鈴とのも五音れもなれもひとつひとつ
いにしへを考れは鏡にも佩にも鈴をつけたるおほかりけり
此鈴のさまいかにもいかなりけむかたのあらはしてうちやの鈴あらはれ
めでたくおもはれてきこえむかれて鐸の圖うつせばせなりき
十九日暑さもふかくまさるかたにひろしのみさされてふとめ
なきをはら原ふくれしく夕日のちかきかたゆるを日のひかりさし
遠近の山々し河のなかまで照り渡りて涼しく又くし

二十日遠紀國のへんを草深くわけて峯へ入りて飯かはりかし
ゆるそれわき法師をさそひて七ヶ嶽をいとうまく坂のぼり手丸にて
瀧の平といふ山なけの原にてきいやさその遠くに見ゆ保瀧沢ハかと
ありし瀧も山のとみよおほてふ詣し道とありといふ
劔ヶ嶺といふをやゝもち過て小天狗大天狗ハ岩とかきて踊をきて
いまもあやしう見ゆ所々あなうちきしを天狗の釣橋といふ
虹のごとき石梁(イハシ)のなかにかいもし雲に埋れたる所くこの
聞つたふ天台山の名高き石橋のやうし画を見しかとたと
おもふ毎に手をつかひたるきさふさきはしめ石
めてあはせし渡るもありいしてわたりつ籠石といふ處の廿之生ととて
云ひとりかみところなせはうちのむかしうつらやかなしと鳴ぬめり
き君といふ名を屏風岩とふなとのいひ大和の大峯に新客の

登りてんかに見さゆらし飛石といふあり横飛石(ハネ)といふあり
馬手につれのなれは北に長き之山をはじめ峯高くひきつゞく
あり雪に田城山何より腰山の十の瀬ちと近きハ寒山高森
目名市北倉の澤岩瀬乃赤倉北嶽なと何ハ弓手の山
のまちかき山田乃薬師峯までの屏風のあたりに多く所やなる
北しをしろく當日石を北とて岨よりをちて見渡しの雪し
本ハなきくろてる名に吹つる風も秋まつ
ここの涼しさ　奥の御座の巖のまへ所のあり所に
十二錢をとらむ山役をとて一百一孔の錢をとゞまりたりし
出しつゝ何とかいへし山のかたよりも山の峰よりせまりてなんの
正角北ゝこそりとやおかりたる嚴よむかしハ雪車に油をさす時も
降雨ハ御衣を潤さぬとてくち唱へてしかるかたに見てありつるかい

護摩の段といへるおもむしに近きところへのぼりをこえつ
みときやうをよみし北燈多きかなとせし也へを語りつく
坐禅石といふありて枝葉の扉明晴に峯のあらしも音
信し座禅北床に紅葉を錦の茵にすてしさゝ
と唱へて錫杖の鳴りせし岨に権現の岩あり獅子頭に
似たりけるをきたりきて胎内潜の岩窟にわたりとをりて
くはをとこあいのあやうしなる岩よちさ多かるを雲の群れ生て
あやうくおのれしかば巌の手にかかりしてのぼり見まへ
大森川、花岡川、霜内川、亂川、長樹川などとな
八千代の流よつかい流る水の音きこえしおしれまりてつくる
ある村里に御山の麓をもとめまえ中れるあり谷をさぐと
吹おろす風に身も寒きさけちらして水無月の空ともおもはれぬぞ

大日岩ぐちより濁るきわまりひとちちおんなかに見ゆれ給ふ
された石のむかうには八千代の苔に埋れて雲の生いまぬてつ
藥師岩の渟水に眼をあらひてそのかたへ流しておりけ
やゝ見めりおりて觀音の窟とて南比良といふ處に
岩屋戸のありし草のやゝかしこにありてみえわかれにおそろしきに
のぼりしそ寺に入りぬる日も暮に日てし鳴きぬ
廿一日つとめて雨に風の吹や吹きやまず十日と雨ふりつく
梢をそよぐ音高く山水にあふれぬなから瀧となりて川と流
廿二日朝なれてれあふれ虚峯といふを出て幸の神平
目蔵平をとほりて姥沢の中のふちより妻子に猫笛
岬よりふ照ひとつを見てゆき手の山張に猿が鼻といふ處あり
西辰のおのれなかしらぬ山いかと高く打くしてきて両

雲ゐまでもりとかりぬ花岡と追かれ川水のかのうきて
人々ひさか[illegible]助られて[illegible]て渡りきちこのかとも又し藤
務の時さう[illegible]咲くてとかとしい紀らけ出て
岡の名花花もひちも咲く秋追き諸道の[illegible]草
露わかして岩本山信正等とふあり[illegible]年比三[illegible]
ひうてう[illegible]銀杏の樹のて[illegible]生ひて[illegible]等出羽言司
まうて河田治郎信正あり[illegible]泰衛のあまき多彌をめよ
建ら[illegible]河田信正さあふ浅利家り建て[illegible]
い傳ふの亮ふあるて菅刈平のわとうふ勝山とふあり[illegible]
寒山と[illegible]これの年の師走の相浅利の軍中れて軍
きみ浅利左衛門尉定頼ころ死せうりの木をて[illegible]手ふ信う
残りし[illegible]家の子郎等 雑川甚右衛門 當與右衛門 明田勘解由

白瀧組馬藤陸丹後等うもあら[illegible]十二月ふ[illegible]まわ[illegible]へ
いと秋田の家へ勝山の名も高らあり[illegible]しとう 豊前[illegible]與右衛門
藤陸満物右衛門ぞてその末の[illegible]もいりてむつきをあり温雅
彌も京さて乾餅掛て事をとめ[illegible]せさ信二つの家[illegible]
此信正等舊稻田の澤の細越ふ處ふ住り[illegible]よしとよつ[illegible]
いほしと語うりの細越ふ残りし礎のあまり[illegible]
ふえあるとい[illegible]鎌倉へのつまりして宗祇のかつめて宗の
御法の鐘此ろゑゆてい[illegible]罪を[illegible]や残りん[illegible]と
いつあるん今光等三野の國谷汲等[illegible]れらとをあしき
阿闍梨教圓の急彼ク過去現在の罪消[illegible]や
あさやの根井地[illegible]瀧[illegible]の白瀧とふいへ道[illegible]あり
きとて[illegible]高を[illegible]観世音ふ手向のう[illegible]

枯れし枝にも花咲くぬるを云ふとて此の根の井と
よみつゝたりしに里人の内外にかしこみのあり松むらい
かたはらの田の中に根井権現とて神の森あり此鶏栖に入りて[illegible]
蝦夷(エミシ)むかしは[illegible]なりしと阪上田村麿此根井の堂に籠て[illegible]心の
[illegible]の瀧あれはおつると見えてあるの[illegible]堂の柱(コヒツリ)[illegible]給ひし
なれは山張のさやの堂のあたりに泉あり夜更て[illegible]心を
きよめて耳にふるゝ落瀧の水の音のみ[illegible]瀧となる
[illegible]瀧と云ふ高[illegible]
[illegible]の堂のあるは安倍頼良の嫡男厨河の次郎貞任の
兄井殿盲目にて安藤太郎良宗といひし[illegible]して身を[illegible]
[illegible]遁(メクラ)き目倉と[illegible]近き十三森と
[illegible]井殿冠者良宗の[illegible]十三佛を置[illegible]堂屋敷と

[illegible]根井堂此あたりて[illegible]七ツ館蝦夷館と云ふあり
[illegible]桂清水の観音と云ふ[illegible]貞任の[illegible]
阿倍良宗の[illegible]
[illegible]尚と[illegible]
[illegible]山坂[illegible]山張の細路を馬手に[illegible]
白瀧とて泉流るゝ音の[illegible]

石[illegible]音[illegible]瀧は
[illegible]十三森の[illegible]道[illegible]梱内村の[illegible]地蔵
大士の行径の[illegible]里に出て此花[illegible]宿つき[illegible]
廿三日[illegible]鳥潟與三郎高守とて[illegible]
[illegible]語り高守の[illegible]本郡森岳鳥潟村に
出て[illegible]河水[illegible]

森かりしきとあはれて涼風の能もさきら澤の奥扇峯
といふ句そのめし聞へしころさるふやまかも風情あるまし
命と掬ふ屋戸の真清水と和句せり神の家ひらは
まつらり花園を出てなほふ行とあり赤原といふ村のうちに清相
なる真言なる大寺のおとといひしその寺ハ以田河邉の郡のむから
の村と赤原といへる寺なまの補陀落寺と甚古寺の跡となるよて
村あり當寺と四ツ毛みちのあし津軽の境をなして關（ロキヤ）合さして
長走といへる清少納言關を興言して 橋走りのせきといへるあ
名子近て聞て長走のせきとも又おもしろき雌神雄神入
道嵯峨萩長森なとをめてる花園を見て神山のやまのまゆ
馬手に大杜あり行道の弓手の田の中に真嬬盛とてあり大杜の
柵の君の妾なりけるとして館の址といふなる大杜川水澤渡りて

二重鳥居杜良山の
薬狭股の村に同名
あり
鍋破しといふもあるま
たく赤石虎の山は
もあるらむ杜山賤り
いふあしなるあらん
ところしらなり

池内といふ名りと蝦
夷詞にしてヘツケナ井
ふとはして津軽ヒラ
井の南にある池内と
いふ名も多し

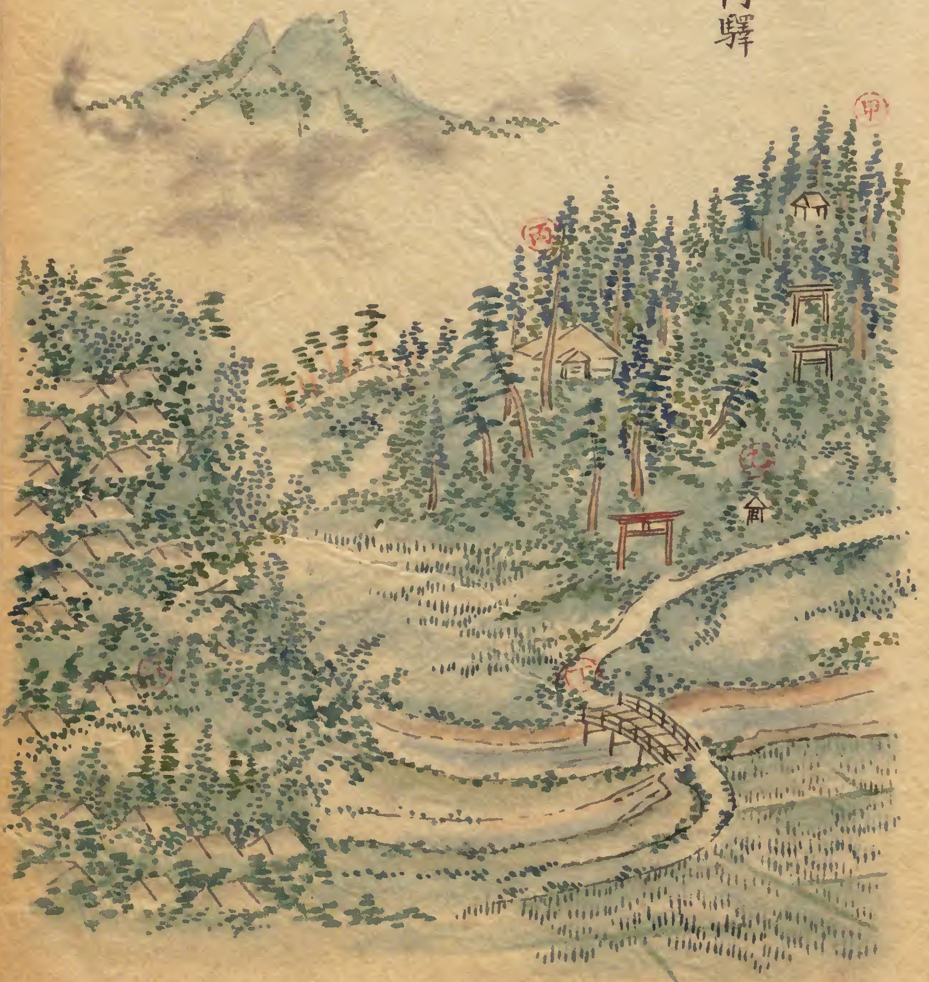
赤石峯村を経て霜内川をわたりて越釋迦内のうまやに
ありぬここより馬をおりくれて風元村をとほりておなしく
亂橋し板子石もとうちすぎて二重鳥居山鍋破（コシ）山など
いと近く見やり遠き雄山嶽虎の臥し蹲りたるがごとくに雲をかか
瀧の森といふもあり名にしおふ杜良の岳をはなれて此あたり
ここらの山のうちより雲の中に見えみえさはみえたる鶴の
大館になりぬこのあたりの比大池に蓮の花盛りとなりめ涼風
うけたる袖のかかはしさに休らひて
蓮咲くころこのあたりも見えぬまでに錦葉に涼しさ
露のたまなる池内といふ村に出て日もくれかかりけり
舟渡りして路ゆくおもしろさは扇田につきてあすかの地をまつ
ある夜とそひより来りて行かふ人も多しとて氏田敬夫のりけり

廿九日比都差岐の村まりまくれ九里足路の中を訪ひく小夜
さのしつかりのさるひくとら河瀬のまと音信く実行まに
秋や来ぬらん吹くる風さを酒しくて

身潔川にかうれてる夏に涼しもなみの
さらふ秋風、あふつも華をとりて、草枕夏を名残
に小夜更て旅や通て虫の声しとそありたかり此
返しまにあらさめれとかてるおもひ語りつき
虫の声も来らと紀厚戸まひとりすかく侍るも
遊ぶやむとさんし

甲 内外御神　乙 金生社
丙 釋迦堂　丁 亂橋　戊 釋迦内驛

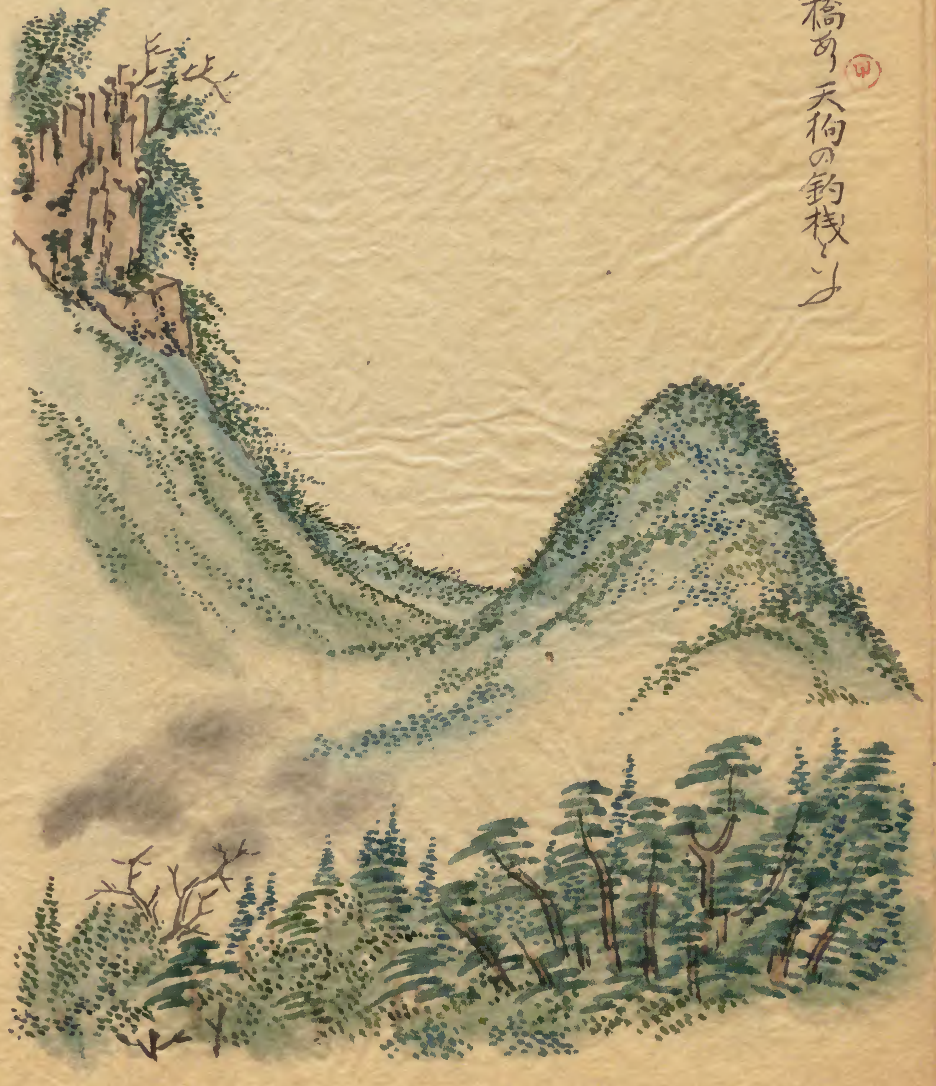
此釋迦堂をむかし道崇入道
韓綵姫のためにとて建しとかや
元暦のころ唐綵姫といふあり
それなん手塚太郎光盛か
女なり大將頼朝に仕へ
義仲に内通し頼朝を殺し
まいらせんとはかりし事顕れ
此唐糸は弘長のとし此姫
の石をたてゝとむらひく
延文の墓誌石堂奥津州
藤崎月輪泥月輪泥の
おとりもちて

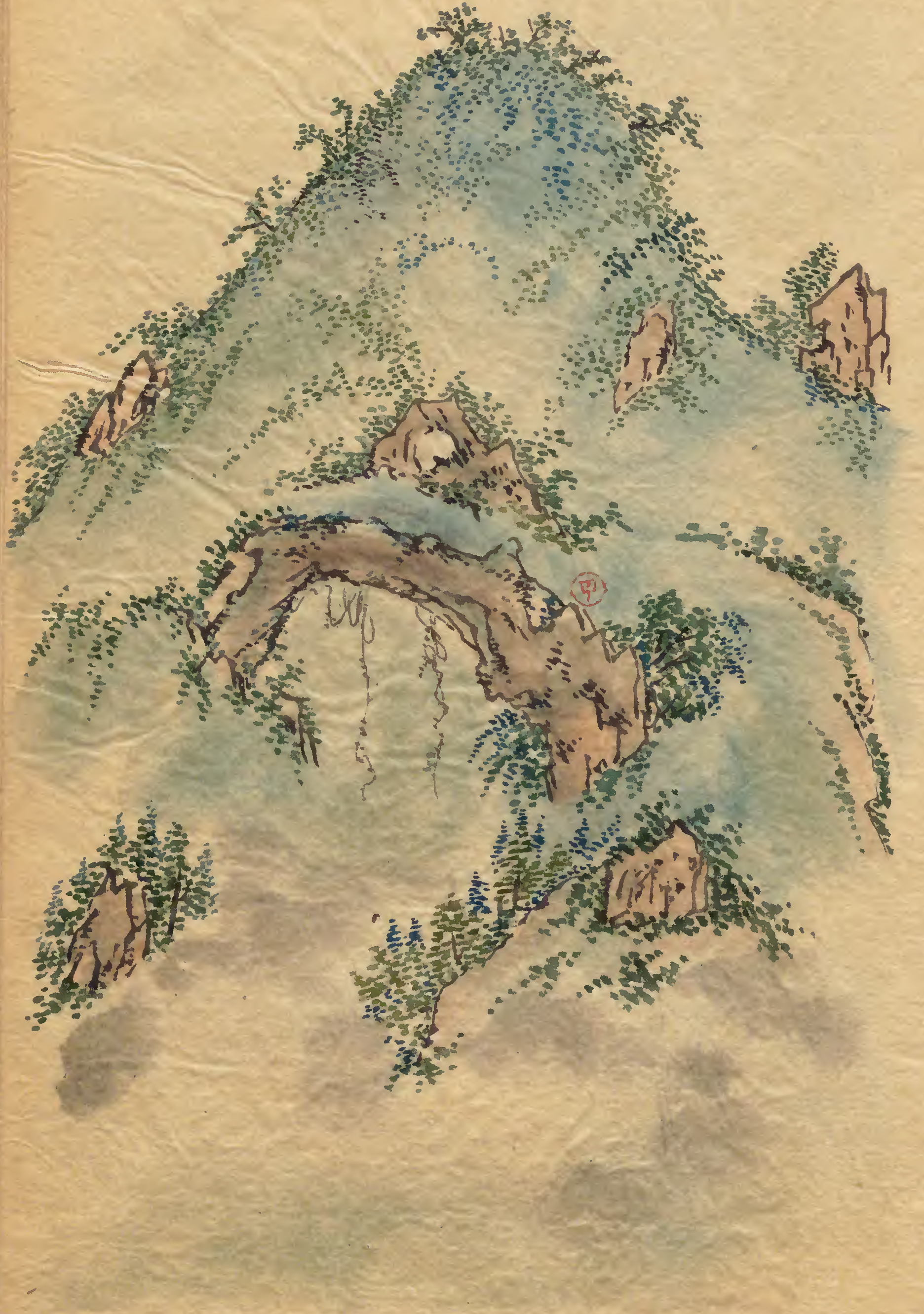


松峯の雞栖傳壽院

国立公文書館
National Archives of Japan

松峯山に石橋あり天狗の釣桟とす





国立公文書館
National Archives of Japan

天狗の釣橋渡るのところ

国立公文書館
National Archives of Japan

胎内潜の岩窻

国立公文書館
National Archives of Japan

阿迦羅明王堂 甲
胎内潜 乙

花罡村
内外宮 白瀧
安東太郎阿倍良宗塋

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
紙数 三十三枚
三十三
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan